

# 『絵本百物語』五から「小豆洗」

第 卅 六 小豆洗

越後の国高田の在に、昔一字の法華寺有。開山より六世に当りて日頭といへる住僧、信濃の浅間が嶽のふもとより片わなる子をもらひて弟子として育けるが、此子人と成に随て才発人にすぐれ、別てはよく物の数をしれり。ある時和尚一合の赤小豆をはかりて其数を問ふに、数を挙たり。また壺升をはかりて数を問ふに、猶其数を挙たり。員へみるに一粒も違ふことなし。

其はつ明なるを賞美して、ゆくゆくはじうしよくをも是に譲らんといつくしみけるを、同宿の僧に円海とて悪僧有しが、和尚の小僧を愛するをねたみて、和尚の留守をうかゞひ小僧をうちころして井の中へ沈め、あやまちて落入たるていにもてなしければ、夜なく小僧の霊出て雨戸に赤小豆をうち付る音おびたゞしく、あるひは夕ぐれの比ほひ、流に出て赤小豆を洗ひ数をよむ。是を見る人きもをけして、此寺に出来るもの稀也。

越後国（新潟県）高田に、昔一字の法華寺があった。寺の開祖から六世にあたる日頭という住職が、信濃（長野県）の浅間山の麓から障害のある子をもらい受けて弟子として育てていたが、この子は成長するに従って才能が人より優れ、特によく物の数を知ることができた。ある時和尚が一合の小豆を計ってその豆粒の数を尋ねると、この子は数を答えた。また一升を計って数を尋ねると、なおまたその数を答えた。そこで実際に数えてみると一粒も間違うことがなかった。

住職はその賢さを褒め、ゆくゆくは寺をこの子に譲ろうと大切にしていた。同じ寺に円海という悪僧がいた。和尚がこの小僧を愛するのをねたみ、和尚の留守をうかがって小僧をうち殺して井戸に沈め、小僧が過って落ちたように見せかけた。その後、夜な夜な小僧の霊が出て、雨戸に小豆を激しく投げつける音がしたり、あるいは夕暮れ時小川に出て、小豆を洗って粒を数えたりする姿が目撃された。これを見た人はみな肝をつぶし、この寺を訪れる者もほとんどいなくなってしまうた。

しかるに、小僧をころせし者は同宿の円海也なりと、村中のものだれとなくいひふらしければ、所の代官是を聞き、円海をとらへて詮議せんぎに及およけるに、はたして違たがふ所なく、土の松原と云所へ引出して死罪に行はれけるに、其夜よりして円海が霊、小僧と共に井戸端ばたに夜すがら争ひ、深更しんこうにいたりて共に井の底に組くみて落る音しては止やみたり。依よりて住職する者久ひさしくたえて、寺は遂げんろくに元禄二年に焼失して跡あとなしといへり。

是則童謡にいふ赤小豆洗あずきあらひの小僧なり。  
焼亡しょうぼうの後にもさまざまの怪異かいありければ、土民どみんつどひて寺の後に卒塔婆そとばをたて、死霊を吊とむひけるにぞ。今はあづき小僧の名のみ残りて、あやしきことは絶たえにけり。  
去されば恐ろしきことを円海坊といひて、ひとをおどすにあづき洗あらいが出たりといふも、越後の国に限りし事ぞ、彼地かのちの人の語かたり侍はべりき。

一方で、「小僧を殺したのは同じ寺に住む円海だ」と、村中の者がだれともなく言いふらしたため、その地の代官がこれを聞き、円海を捕らえて取り調べたところ、やはり間違まちがいなかったので、円海は土の松原という所へ引き出され、死刑に処された。するとその夜から円海の霊が小僧の霊と共に出るようになり、井戸端で一晚中争い、夜がふけてから井戸の底に組み合ったまま落ちる音がしては止む、ということが続いた。そのためこの寺は住職をする者が久しく絶え、ついに元禄二（一六八九）年に焼失し、跡形もなくなってしまったという。

これがすなわち童謡に歌われる「小豆洗あらいひの小僧」である。寺が焼け落ちた後にもさまざまの怪異が起おこったので、土地の人々が寄り集まって寺の跡に卒塔婆を立て、死霊を吊とむったという。今は小豆小僧という名ばかりが残って、奇怪なことはなくなったそうだ。それゆえ、恐ろしいことを「円海坊」と言い、人を脅す時には「小豆洗あらいひが出たぞ」と言うのも、越後国に限ったことであると、かの地の人は語った。